

人は誰しも幸せになりたいはずなのに、なぜ世界は不幸に向かって暴走するのだろうか。

差別、分断、排斥、核兵器、自国ファースト……。こんな恐ろしい時代が世界でほぼ同時多発的にやってくると誰が予測できただろうか。

インド独立の指導者マハトマ・ガンジーが指摘した「七つの社会的罪」。つまり「理念なき政治」「労働なき富」「良心なき快樂」「人格なき学識」「道徳なき商業」「人間性なき科学」「献身なき信仰」のことだが、現在の不幸の到来は既に彼が予想、「眞贋の目なき也」という、さらなる大罪が顕在化した。

先ごろ、音楽の都、ウィーンで知られるオーストリアで“反移民・難民”を訴える中道右派の国民党が15年ぶりに第一党に返り咲き、欧州連合(EU)内の足並みが乱れる可

音楽の力で人が尊重し合う世界を



能性が出てきた。モーツァルトが生きていたら母国やEUの現状をどう感じるだろう。

彼が活躍した1700年代の欧州でも、階級制度や宗教問題をめぐる理不尽な社会問題が噴出。彼の代表作のひとつであるオペラ「フィガロの結婚」も貴族を批判した過激な問題作と非難され、上演禁止の憂き目にあった。しかし、時代に反逆するようなこの作品は、気高い人間賛歌として現在も世界中で演奏される“人類の宝”となった。

世界中の権力者は、このオペラの第4幕のフィナーレの素晴らしさを知るべきだ。人は誰しも過ちを犯すが、悔い

改め、その過ちを許すことができるのもまた人間なのだ。

音楽の魔法よ、人の心を和らげ、健全な人間らしさを取り戻す手助けをしてほしい。音楽よ、感動によってどうか人の慈愛や叡智を呼び覚まし、愛と希望、信頼を与えてほしい。武器を捨て、楽器を持ち、分断ではなく協力・団結することで、人々が尊重し合える世界を作れるだろう。

全世界が平和という安らぎと幸せを享受できる日が来ると信じたい。

(さとう・しのぶ—声楽家)

—毎月第3金曜日掲載

音 楽